

皆さんこんにちは。私は福島市から参りました。

明日で東日本大震災から丸 6 年が経とうとしています。テレビや新聞ではこの時期になると 3.11 の事を繰り返し報道しますが、その度に枯れたはずの涙が、まだまだ溢れてくるのです。

私には当時 2 歳の娘がいて、妊娠 8 ヶ月でした。その 1 月に家を新築したばかりで、2 人目の子供を出産する前に家のものをあれこれ準備し、ようやく形になったばかりでした。

あの日の地震は、この世のものとは思えぬ異常な揺れでした。大地は大きくスライドし、鳥たちは群れになりまるで遠くへ逃げるかのように飛んでゆき、空はみるみると暗くなり、季節外れの雪がぼたぼた降ってきたのです。私はその時、これは今までに体験したことのない、とても大変なことが起きるかもしれないと無性に不安になりました。その予感は的中し、見たこともない巨大津波が沿岸部を襲いたくさんの人々の命を奪い、原発事故へとつながってしまうのです。

やがて県外やさらに海外に住む友人から原発を心配するメールが届くようになりました。原子力発電所についても放射能についても無知だった私は、その意味を理解するまで時間が掛かりましたが、とにかく良くないことが起きていると一日毎に知ることとなりました。そして福島市の線量が 1 番高くなった 3 月 15 日の夜、逃げるようにして新潟へと自主避難しました。

新潟では自費でホテル住まいをし、検診の度に福島と行き来をし、6 月には予定していた福島 of 病院で長男を出産しました。喜びに浸る暇はなく、病室で私は次にどこに避難しようかとそのことばかりを考え、調べる毎日でした。床上げにもならない時期に新生児の息子を連れ XX の受け入れ先に見学にも行き、7 月には周りの心配をよそに無理を承知で二人の幼子と母子避難を始めました。

XX には縁もゆかりもなかったのですが、自主避難者の受け入れが良かった為を選びました。ただしそこは取り壊しが決まっていた住居で、一年以上閉鎖され状態はとても悪く、最低限の補修をしていただいた上での入居でした。いざ住んでみると不具合が多く、そこから来るストレスや体の不調との戦いは退去するまで続きました。

誰も訪ねても来ない密室で誰からの手助けもない育児の日々に身も心も限界になり、私は次第に追い込まれてゆきました。夕焼けに染まる空に福島を重ねながら、狭く薄暗い台所で子供に見られぬよう泣くこともありました。

その後入居者は増え、多い時で 100 世帯もの避難者が住んでいました。特に同じ世代の子を持つ親同士でコミュニティが出来、傷を舐め合うように支え合い暮らしていました。

母子避難から一年になる頃、主人が仕事を辞め家も売る覚悟をし、その数カ月後 XX に越してきてくれました。私はすでに限界を超えた日々が続いていたため、あの時主人が来なかつ

たら…と思うとぞっとします。

それから私達家族は一緒に暮らすことが出来ましたが、主人は慣れない地での仕事に苦戦し、三年間で三回転職せざるを得ませんでした。なかには社内で福島ネタで馬鹿にされたり福島訛りをからかわれたりしました。いじめや差別は、大人の世界でもあるのです。子供達もすっかりXXの生活に慣れ、幼稚園や学校に通うまでに成長し、私もようやく自分自身に余裕が出来てきました。それでも、どうしてもXXの生活に馴染むことが出来ず、主人の仕事も先行きが厳しく、住宅支援が終わってもなおXXに居続ける選択が出来ないでいました。金銭的にも精神的にも、避難生活を続行させる事に限界を感じた私達は、震災から5年目の去年春に、福島に戻る選択をしました。本当なら今すぐ福島に戻りたい、と思いつけてきたものの、当然放射能への不安があります。それでもまた一から他の地で生活を始める余力はすでに無く、自分の決断に迷いがあるまま眠れぬ日々が続きました。

子供達は転校、転園をし、主人は元の会社に戻る事が出来、今は小さいアパート暮らしですがだいぶ落ち着きました。5年間の避難生活では放射能から逃れる事が出来たけれど、様々な事が普通の暮らしからはかけ離れていたもので、今は本来の姿の暮らしが出来ているように感じます。子供達は大好きな祖父母に思いっきり甘え、私も見知らぬ地でずっと張りつめていた緊張から逃れられ不調は減りました。その引き換えに、日々放射能との戦いです。時々大きな不安に駆られ、やはり福島を離れるべきなのではと落ち込む日もありました。自分の子育てに、自身が持てないのが辛いです。自然豊かで農作物が自慢の私の故郷がこのように変わってしまった事実を、未だに受け止められないでいます。

私は、3.11以降、福島に残るのも地獄、出るのも地獄、とと思ってきました。そのくらい私達は、あの日を境に悲しみを背負って生きてゆかなければならなくなりました。この先何十年、何百年続く放射能汚染を抱え、二度と震災前の福島には戻らない現実、これを絶望と言わずに何があるのでしょうか。

それでも時は6年流れました。絶望の中でもこうして生きてゆかねばなりません。それは、なんの罪もない子供達の未来の為にも、絶望ではいけないのです。

福島に住むからには、子供達には食べ物に気を付ける、免疫力を高める、などいろいろと取り組まなければならない事がたくさんあります。そのなかの一つに、放射能から離れる目的の保養があります。今住んでいる地域よりも線量が低い地域に出掛けることを意味します。私も休みの度に保養を探し、長い休みには行けるだけ保養に行き、普段は週末だけでもと近場の保養に参加したりもしています。保養に出掛ける事により放射能から逃れられていると思うだけで、身も心もリフレッシュできます。そこで子供達はのびのびと遊び、親たちは普段出来ない放射能の話もし、帰るときはまた福島でがんばろう！と元気になれるのです。本来ならば国を挙げて行うべき保養事業を、一般の市民団体が一生懸命続けてくれている現実に憤りを感じます。そして保養の必要性を知らない親がまだまだいること、仕事を持つとなかなか子供を保養に連れていけない事、金銭的負担など、問題は多いのです。チェル

ノブイリのように保養を義務化して、誰にでも保養に出掛けることの出来る権利が欲しいのです。

福島の問題は、一言でなんか言い表せません。一筋縄ではいかないのです。そこには、複雑で様々な問題があり、人それぞれの致し方ない現状があるのです。これからの福島に求められるのは、どんな選択をも受け入れられる多様性だと思います。

福島のお母さんは皆どこかで、自分を責めています。避難出来なかったこと、放射能の知識が無かったこと、避難しても可哀そうな思いをさせてしまっていること。そんななかでのいじめ問題。

まずは大人から、正しい福島の実情を知ってもらい、差別も偏見も無くし、福島の問題は、国民一人ひとりの問題として考えていただきたい、と切願します。

6年前の今日は、福島は世界のフクシマではなかったのだから。